

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
『見賢思齊』の精神で たくましく未来を切り拓く児童生徒の育成	①自ら学ぶ子どもの育成 ②「ぼかぼかココア」を実践できる子どもの育成 ③たくましい心と体を身に付けた子どもの育成 ④進んで読書する子どもの育成 ⑤郷土を愛する子どもの育成

達成度
A: ほぼ達成できた
B: 概ね達成できた
C: やや不十分である
D: 不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価

① 自ら学ぶ子どもの育成

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	小中一貫教育の推進 ○9年間を見通した小中同一の学校教育目標 ○児童生徒を「守り・育て・伸ばす」一貫教育 ○保護者や地域の期待に応える一貫教育	小中一貫教育の視点のある教育活動	・小中一貫のシステムを生かした乗り入れ授業、行事、人権教室や縦割り活動、合同の研修会を計画的・効果的に実施する。 ・ブロック集会の充実を図る。	・毎週木曜日に開催する小中一貫推進会議の内容を全職員に伝達し、両校の現状を確認しあったり、地域情報などを全職員で共有する。 ・各種行事を行う前後に「目指す子ども像」を意識した内容とするための小中委員会や連絡会を行う。 ・ブロック集会をALの視点に則り、「出演・役割・承認」のある集会にする。	B	○小中一貫教育運営システムが職員間で浸透してきており、職員の評価は90%を超えている。 ○保護者の評価は70%台だった。 ○ブロック集会の内容について職員から改善の必要性が出ている。	○学校便りだけでなく、各種便りにて保護者へ理念や取組み状況の説明を行っている。 ○互恵性のある取組みを継続していくために内容の精選と洗練が必要。
教育活動	●学力向上 学力テスト等の活用 意識調査の活用	主体的で対話的な学び	・県調査の分析を基に成果と課題を児童と共有しながら改善を図る。 ・児童アンケート「授業は楽しく分かりやすいですか」において、(あてはまる)と答える児童の割合を85%以上とする。	・各種テストの分析結果を資料としてまとめ、学年・学級・個別レベルでの状況を児童と共に把握する。 ・教師は分析を基に重点指導項目(教科・単元・領域)を設定し指導方法の改善を図る。 ・全教科、全学級において、話し合い活動等の主体的な学習を「めあて」達成のための活動として取り入れる。 ・「めあて」の達成に向かってどれだけ学べたか、どのように学んだかの振り返りを記述させるようにする。 ・基礎学力向上のため、家庭学習時間や具体的な内容を紹介することで家庭学習の量的・質的な向上を図る。 ・中学期と情報を共有し「ノート指導」「学習過程」において統一した指導を行っている。	A	○教師の評価が各種テスト結果分析による授業改善、きめ細やかな指導、家庭学習、3項目とも90%を超えていた。 ○児童の授業に関する評価についても86%と高い評価を得られた。 ○各種調査結果についてすぐに学力向上部会で分析を行い、それを会議で全職員が共有してきた。 ○児童に学習過程やノートの使い方などが定着してきた。	○振り返り3行以上の指導から、振り返りの内容の充実に向け、内容が充実するよう指導を進める。
	○授業の質の向上に向けたICT活用教育の推進	ICTを活用した指導方法改善	・全学級に配置された電子黒板や書画カメラで分かりやすい授業に取組む。 ・アンケート調査にて「ICTの活用により授業が分かりやすかった」と回答する児童の割合を90%以上にす	・児童の学び合う活動における電子黒板や書画カメラの活用方法を紹介しあう(新出漢字の学習・外国語活動の発音・班学習の発表など)。 ・研究授業の際に、ICTが目的ではなく、授業の質の向上に有効であったかの検証を行う。	A	○ほとんどの授業でデジタル教科書や画像・動画の提示等で電子黒板を活用し、児童の関心意欲の喚起ができていた。	○思齊館のIWBサーバーを活用し、児童生徒の作品鑑賞やオリジナル教材の共有を進める。
	○教職員の資質向上	授業研究の充実 本校教育課題の改善	・計画的な職員研修、授業公開の実施(講師招聘を含む)を行う。 ・教職員アンケート「知・徳・体」に関する項目(7～9、12～16、18～20)の平均で、(あてはまる)と答える割合を90%以上とする。	・日常の授業改善にも生かせるよう参加型の研究協議を行う。 ・5月の職員会議で昨年度の学校評価結果を全職員で確認しあい、担当ごとの改善策を文字化して、取組む。 ・10月の中間振り返り時に進捗状況を確認しあう。	A	○教師の自己評価「思考を深める授業づくり」「対話的活動」「みんなの解決的な学び」いずれも向上している。 ○めあて・まとめ・ふりかえりの学習過程が定着し、研究の視点で授業改善のための研究会が実践できた。	○「深い学び」を児童の姿から授業の考察を行い、児童がそれぞれのめあてのもと課題・計画を立て、見直しをもって学習に臨むよう単元構成(カリキュラム・マネジメント)を進める。

② 「ぼかぼかココア」を実践できる児童の育成

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	自己肯定感を高める教職員の関わり 望ましい集団づくり	・児童アンケート「自分のよいところが言えますか」(あてはまる)と答える児童の割合、80%以上とする。 ・児童アンケート「心の教育」に関する項目(5～8)の平均で、(あてはまる)と答える児童の割合を、90%以上とする。	・教職員が児童一人ひとりに共感的に関わり、自己肯定感が高められる声かけ・目配りを行う。 ・人権教室(年9回)などで、子どもの実態に沿った課題を投げかけ、人権意識を高めると共に、行動へとつなげていく。 ・子どもが自分らしくいられるように、居場所づくりに取り組む。 ・人権・同和教育の視点に立った授業を、全クラスで行っていく。	A	○「私たちの道徳」を活用した授業実践が進んでいる。 ○人権教室については地域からの情報提供を受け、本校の人権課題にあつたものに即座に対応することができた。 ○教職員の自己評価も95%ととても高かった。 ○冬休業中に教科化に向けた研修会を実施することができた。 ○別業を含めた年間計画の作成することができた。	○道徳の授業の進め方、評価に関する研修を計画的に行う。
教育活動	●いじめ問題への対応	早期発見・早期対応体制の充実	・思齊いじめ防止対策基本方針に則って、計画的な取組を進める。 ・いじめを覚知してから、1ヶ月以内に解決をめざす。 ・22条委員会を年2回以上開催する。	・いじめ・不登校の開発的取り組みとしてケース会議を行う。 ・月初めの「いじめ・命を考える日」に職員が交代で各学級に入り、いじめ・命に関する話を、考える場を保障する。 ・「O月の心」を定期的に実施し、個々の状況をつかむ。 ・22条委員会などを通して、SCや教育相談担当、級外等の連携やPTAや学校評議員等の外部との連携を図り、多面的に子どもの育ちを見守る。	A	○いじめアンケートや「O月の心」アンケートから拾い上げた児童の悩みや相談に即座に対応でき、早期の解決を図ることができた。 ○保護者からの相談を真摯に受け止め、いじめの解決に向けて全職員で取り組みを進めた。また、児童の育ちを見据えた支援を行った。	○いじめの未然対策として、児童が満足できる学校生活、児童の自己肯定感を育む取組を行う。
教育活動	○特別支援教育の充実	教員の専門性の向上	・児童の実態を把握し、個に応じた適切な支援方法を探り、全職員が共通理解のもと、指導支援を行う。	・「気になるアンケート」を5月と2月に実施し、児童の実態把握に努める。 ・担任と相談し、生活指導員の配置を状況により見直す。 ・保護者との面談を計画的に行う。 ・年3回の職員研修を計画し、実施する。 ・巡回相談や教育相談など専門機関との連携を積極的に図る。	A	○保護者面談、ケース会議、教育支援会議と学校全体にわたって児童の理解が深まった。 ○学習環境のUD化が全校で統一され、個別の具体的支援方法の研究も進んできた。	○配慮を要する児童と学級との結びつきや本人の自立に向けた支援について保護者や医療機関、外部専門機関との連携で学んでいく。

③ たくましい心と体を身に付けた子どもの育成

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	望ましい生活習慣の形成	・徒歩通学を奨励し、「暑さ・寒さ・きつさに負けない心と体の育成」を図る。	・徒歩通学の児童を賞賛したり、効果を指導したりして、児童に徒歩通学を奨励する。 ・保護者に徒歩通学への理解を図っていくために、PTA常任委員会で説明(年3回)したり、学校便り・学級通信を活用(年3回)したりする。	B	○PTAや地域の方々に趣旨を説明し、徒歩通学に向けて児童の意識は変わってきたが、まだ車の送迎が残っている。 ○朝食の喫食率が87%と低い。	○徒歩通学については保護者の意識改革が必要。

④ 進んで読書する子どもの育成

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○読書の推進	読書に親しむ環境整備	・図書時間の確保 ・学級文庫の充実 ・図書館の整備	・週1回は図書時間を確保する。 ・PTAや保護者と連携し、学級文庫に児童の読みたい本を揃える。 ・「行きたくなる学校図書館」に向けてポップをつけたり、催し物をしたりする。	A	○一人130冊(下学年)120冊(上学年)が達成できた。朝の時間の開館やイベントの充実、司書の働きかけにより本に親しむ児童が増えている。	○まだ、本の楽しさに出合っていない児童への手立てを複数見つけ、小学部時代に本との出会いを体験させる。

⑤ 郷土を愛する子どもの育成

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○郷土学習「思齊学」の積極的な取り組み	「思齊学」の充実	・久保田町に関するアンケートで「久保田町が好き」と答える児童の割合を90%以上とする。	・地域への興味や関心を高めるような発達段階に応じた思齊学を展開する(指導案・活動計画の保存)。 ・校内研究の組織「心育て部」でスタートブックの活用やボランティア活動等の年間計画を整理する。	C	○工夫された「思齊学」に取り組んだ学年もあったが、今年度の目標であった組織として思齊学の構築(人材バンク整理、年間計画作成)までは至らなかった。	○思齊学のねらいを明確にした年間計画の作成、人材バンクの整理を校内研の組織で取組む。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

○児童・保護者・職員の学校評価アンケートを基に教育活動の全体を全職員で総括したことで、成果と課題が明確になった。特に、本年度は研究指定をいただき校内研究に取り組んだことで、講師や書籍に学びながら児童に育むべき資質・能力を明確にしながらか学習指導や望ましい生活習慣の定着を図っていくことが理解できた。さらに、それぞれが工夫・実践したことで、学校全体としても手ごたえ(児童の姿)を感じる事ができた。職員が目指す子ども像に向けて力を結集し、高みを目指す雰囲気をつくる事ができた。来年度は新学習指導要領の本格実施を目前に、計画的に研究組織を機能させることで、本校ならではのカリキュラムの確定をはかりたい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目